

[研究ノート]

学校教育におけるリコーダー奏法

—タンギング・シラブルについての考察—

Teaching the Recorder in the Classroom

—Some Thoughts on Tonguing Syllables—

浅井 愛

ASAI Ai

〈抄 録〉

本研究は小学校・中学校の器楽領域におけるリコーダー演奏の基礎であるタンギング奏法に焦点を当てた。中でも、タンギング・シラブル（発音）の種類について考え、指導法の可能性をまとめたものである。リコーダーを学ぶ児童や生徒（以下「子供たち」という）のほとんどが教科書に記載されているタンギング「トゥ」の練習から始める。しかしながら筆者は、タンギングの指導経験を通じ、この発音が子供たちにとって難しいのではないかと疑問をとなえる。

本研究は3つの視点から紐解く。まず、リコーダーの基礎であるタンギングについて考える。特にタンギング「トゥ」の発音が難しく感じてしまう原因はどこにあるのか。2つ目に子供たちにとって発音しやすいタンギングとは何かを考える。3つ目は正しい発音方法とは何か、正確な舌の位置を考える。以上3点を考察することによって、より効果的なタンギングの指導法を追及する。

キーワード：リコーダー、タンギング・シラブル、器楽教育、初等教育、中等教育

Abstract

This paper focuses on tonguing, one of the foundations of recorder playing, in the context of teaching the recorder in elementary and junior high schools. In particular, it identifies the variety of tonguing syllables, and the possibilities for teaching them. Almost all children beginning to study the recorder start with the “Tu” tonguing in the recorder textbook. However, based on personal experience teaching tonguing to children, this author has come to believe and would like to make it more widely known that this actually may be one of the more difficult tonguing syllables for children. This paper addresses this issue from three vantage points: (i) first, tonguing, which is a foundation of successful recorder playing, and especially the reason for the apparent difficulty in using the tonguing “Tu”; (ii) second, the variety of tonguing syllables, and the potentials of each, and which tonguing syllables are typically easier for children to produce; (iii) third, how to achieve correct “pronunciation” of the various tonguing syllables, and the correct positioning of the tongue for each, and based on this summa-

alize some possibilities for teaching tonguing more successfully in the future.

Keywords: recorder, tonguing syllables, educational instruments, introductory level education, junior high (middle school) education

1. タンギングについて

筆者はリコーダーの指導経験を通じ、子供たちの多くがリコーダー演奏の基礎となるタンギングに対して苦手意識を持っていることを感じていた。具体的には、教科書に記載されているタンギング・シラブルのtu（トゥ）を発音しづらいと思っていることや、舌の位置が正確でないため発音がうまくいっていないことなどが挙げられる。本研究はこれらの苦手意識の原因を調べ、解決方法を探りながら、今後のタンギング指導法の可能性を考察しまとめたものである。

まずは、タンギングについて調べる。

タンギングは、管楽器を吹く際、フレーズの最初の音に、明瞭な出だしを与えるための技術である¹⁾。また、ドイツ後期バロック時代のフルート奏者、音楽理論家、作曲家のJ. J. クヴァンツは次のように述べている。「舌（タンギング）は本来、フルートを演奏するに際して音に生气を与える道具である。舌の使い方により奏者の特性が出る」（クヴァンツ 2017、74頁）。

そのため、「タンギングはリコーダーの言葉である」と筆者は考える。リコーダー演奏上達のカギは、この言葉（タンギング）を自由自在に扱い、巧みにしゃべれるようになることである。タンギングはたくさんの種類があり、音型によって適切な言葉（タンギング）をあてはめることが重要である。さまざまなタンギングを身に付けることでリコーダー演奏における音楽的表現が豊かになる。しかし、リコーダーは息を入れれば音を出すことは容易にできてしまう反面、音に表情を付けるためには正確なタンギングが必要であるといえる。以上のことを考えると、リコーダー奏法のテクニックの中でも一番難しいとされるのがタンギングである。

2. 学校教育の中のタンギング—舌の動きについて—

タンギングの発音を確実にを行う際には、正確な舌の位置がどこにあるのかを理解することが最も大切である。そもそも、子供たちが学校教育の中で舌の動きを意識的に学ぶことのできる機会は、いつなのだろうか。まずは、リコーダーが始まる前の段階である、鍵盤ハーモニカの授業内容を調べたい。現在、出版されている小学校1・2年生の教科書を調べたところ、音符の下に「とう」と記載されており、「どをおさえたまま、『とうーとうー』とおはなしする かんじで、いきをふきこもう。おとをくぎるときやとめるときは、したをつかっていきをとめよう」（教育出版 2018a、32-33頁）との記載があった。しかし、教科書には正確な舌の位置の説明や舌の位置が視覚的にわかるような絵などは確認できなかった。また、他の教科書も確認したが、タンギング自体の記載がない、そして説明がない、という教科書もあった。

小学校3年生の教科書では、タンギングは「したを使って息をくぎることを、タンギングといいます。トゥ、ルと発音するときのように、したを使います」（教育出版 2018c、19頁）、「『トゥ』と言うときのようなしたの動きを使って、音を出したり止めたりすることをタンギングといいます。ひくい音は、『トー』と言うときのようなかんじで、息をやわらかくつかってふきましょう」（教育芸術社 2018c、17頁、35頁）と説明している。しかしながら、こちらもまた、舌の正確な位置を確認できるような

詳しい説明や絵はなかった。

中学校に入ると、教科書に正確な舌の位置を確認できる挿絵が入り、より具体的に説明が始まる。「リコーダーを吹くときに、息を舌で止めたり、出したりすることをタンギングといいます。適切なタンギングを用いると、生き生きとした表現が可能になります。リコーダーのタンギングは、“^{トゥ}tu”や“^{ドゥ}du”といった発音を使います。音域や音のイメージによって使い分けるとよいでしょう」(教育出版 2016、6頁)。「舌を使って音を出したり止めたりすることを『タンギング』と呼び、リコーダーにおいては、これが美しい音で吹いたり、豊かな表現をしったりするための基本になります。リコーダーのタンギングにはいろいろな方法がありますが、まず、『^{トゥ}tu』という発音を使ったタンギングに慣れましょう」(教育芸術社 2016、6頁)。

なお、教育芸術社の方の教科書には、音を出して音を止めるところまでの正確な舌の位置がわかる挿絵があった。

中学校に入り、タンギング・シラブルも種類が増える。正確な舌の位置の説明、音を出して止めるまでの舌の位置がわかりやすい図、発音の方法などが掲載されている【表1】。

【表1】『中学器楽 音楽のおくりもの』(教育出版)に掲載されている
タンギングの種類

| | 硬い音 | 柔らかい音 | さらに柔らかい音 |
|-----|-------|-------|----------|
| 高音域 | ti ティ | di デイ | ri リ |
| 中音域 | tu トゥ | du ドゥ | ru ル |
| 低音域 | to ト | do ド | ro ロ |

出典 『中学器楽 音楽のおくりもの』(教育出版 2016、6頁)に掲載されている表をもとに筆者作表

3. タンギングー日本語との違いー

では、何故タンギングは発音しにくいと感じてしまうのだろうか。ひとつには、リコーダーはヨーロッパで誕生した楽器であるため、タンギングの発音も日本語とは異なり、日本人の私たちにとってタンギングのtu(トゥ)は発音しづらく感じるからであろう。日本語にはtu(トゥ)から始まる言葉が存在しない。またtu(トゥ)は一言ではっきりと発音することが大変難しく、「ツー」「チュー」「ティュー」など、正確な舌の位置を知らずに自己流で発音してしまう子供たちが多いように感じる。

日本語とヨーロッパの言語には調音点と調音法、2つの違いがある。調音点とは口の中のどこで発音されるかの分類である²⁾。ヨーロッパの言語では、tは歯茎音に分類される。舌の先と歯茎でつくる音のことである(他にはdなどがある)。詳しく説明すると、前歯の裏側(歯の付け根)と歯茎に舌先がくっついた状態になっている。鏡で口元を正面から見ても舌先は見えない³⁾【図1】。

日本語tの調音点は歯と歯茎にどちらも付いた状態で発音される。舌の位置は前歯の裏側全体に、舌の上部、前方2センチほどがくっついている状態であり、鏡で口元を正面から見ると上の歯と下の歯の間から舌の先が見えてしまう⁴⁾【図2】。

調音法とは息の出し方による分類のことである⁵⁾。ヨーロッパのtは息の通り道を調音点で完全に止めてから、急に息をはき出す破裂音である(他にはp、b、dなどがある)。日本語のtも破裂音に分類されるが、ヨーロッパの言葉に比べ、息の通り道をためずに息をはき出す。

以上のように、日本語との違いを確認することができる。タンギングは、初めて外国語を習ったと

きと同じように、慣れるまでには時間がかかるが、舌の位置を確認しながら、何度も繰り返し、声に出して練習すると、正確な舌の位置がわかって、演奏に大変役立つと考える。子供たちには、外国語同様、巧みにこなすようになるには時間がかかることを、事前に話しておくことが大切である。



【図1】 ヨーロッパの言語「te」



【図2】 日本語の「テ」

出典 田中せい子『リコーダーのタンギング—生き生きとしたアーティキュレーションのために』アントレ編集部、18頁をもとに筆者作図

4. タンギングの発音

前章で述べたようにタンギングを発音する時は、正確な舌の位置を確認しなければならない。筆者はタンギングのtu（トゥ）を発音しづらい人に、te（テ）をお勧めしたい。日本語の「テ」とヨーロッパの言語「te」は、舌の位置が正確には違うが、発音方法はとても近いと考える。イタリア・ルネサンス期の音楽理論家であるシルヴェストロ・ガナッシ・ダル・フォンテゴ Silvestro Ganassi dal Fontego は著書『フォンテガーラ』（1535）の中で、舌のいろいろな使い方「タンギング」についてまとめており、自分の使いやすい母音を見つけて発音することを推奨している⁶⁾。また現代のリコーダー教本にも「te」が取り入れられており、ヨーロッパにおいてこの発音は、とてもポピュラーなものだと考えられる。

5. タンギングの発音手順 — 「te テ」「tu トゥ」 —

発音の方法手順は以下の通りである。一つ一つ丁寧に確認しながら発音していく必要がある。

- a) 舌や口には力を入れない。
- b) 顎（あご）は下げない。舌だけを動かすようにする。
- c) teの場合は口の形は「エ」に近い。
tuの場合は口の形は「ウ」に近い。tuを発音する際は、口を前に出しすぎないこと。口元に力が入りやすくなるので、注意をする。
- d) 発音する準備をする（※舌の上方ごく先端部分を上の歯の付け根に接する歯茎にあてる。このことで息が遮られる）。
- e) 発音（te・tu）をする。舌を下手前に引くように（※顎は下げない）。
- f) 発音直後の舌の先端は中に浮いた状態。
- g) 再び上の歯の付け根の歯茎に当て、次の準備をする。
- h) 繰り返し行う（※舌のみ運動している）。
- i) 喉（のど）は使わない。

練習方法としては、まずリコーダーを口元近くへ準備し、タンギングを声に出し発音練習をする。その後、こそこそ話の要領で、無声音で練習をした直後に、リコーダーを構えて音を出すと感覚がつか

かみやすい。慣れた人が口元を見てあげながら、一緒に練習するのも良い。また、はじめは音符の上で使用しているタンギングを、詳細に書くことをお勧めする。タンギングを自覚しながら演奏することがタンギング上達への近道である。

6. 母音の選択

今までのことを踏まえ、子音と母音の組み合わせを表にしたのが【表2】である。タンギングの母音の選択は自分自身で一番発音しやすいもの考えることが最善である。子音のdはtよりも舌を使う範囲が広くなり、発音した時に息のスピードが弱くなる。低音域を演奏する場合に適している。

【表2】 タンギング 子音と母音の組み合わせ表

| 母音 子音 | a | i | u | e | o |
|----------|------|-------|-------|------|------|
| t | ta タ | ti ティ | tu トゥ | te テ | to ト |
| d | da ダ | di ディ | du ドゥ | de デ | do ド |

- a) ta (タ) da (ダ) は日本語の発音と近いので、使いやすいように思うが、発音直後に顎が下がる。タンギングの注意することのひとつに、顎がどのように使われているのかきちんと意識するということが挙げられる。発音するたびに顎が下がると、息の流れが一定でなくなってしまうため、顎は固定し、舌だけが運動していることが理想である。
- b) ti (ティ) di (ディ) を発音する。口元がイの形になるため、口の中が平べったくなり、舌の動きが制限された分、舌先に意識を持っていくことができる。歯は自然と閉じ、舌の根元を固定するように意識したい。
- c) tu (トゥ) du (ドゥ) を発音すると、口が前に突きでて、唇(くちびる)の横に力が入りがちだ。力が入らないことを意識できれば活用できる。口元に必要以上に力が入ると、「ツー」や「チュー」「ティュー」など、一言で発音できていないことがあるため、その場合は別のタンギングを使用するのが最善である。
- d) te (テ) de (デ) は、一番理想的なタンギングの発音のひとつだと考える。母音のi(イ)と同様、口の中が平べったくなり、舌の動きが制限されるため、舌先に意識を持っていきやすい。
- e) to (ト) do (ド) を発音する場合、母音のa(ア)と同様、顎が下がらないように意識することが大切である。バスリコーダーのようにクルックと呼ばれる曲がった金属製のマウスピースを使って息を送り込んで音を出す楽器は、歌口の形状が丸いことが多いので、このタンギングは使用可能である。

7. おわりに

リコーダーは音色が優美で、音楽的に深みのある表現を、多彩に伝えることのできる魅力的な楽器である。その魅力を最大限に活かすには、指導者がその魅力を伝えることができるよう、本来のリコーダーの音色を認識し、基礎を深く理解することである。特にタンギングを確実にできることが、リコーダー演奏上達の近道と考える。タンギング・シラブルは種類が豊富にあり、自分に合った技術や言葉を使って良いと考える。また指導する際には、子供たち一人一人がどのタンギングが発音しやすいの

かを、一緒に考えてあげることが大切である。小学校では正確な舌の位置を理解することを目標に、中学校では表現するためのタンギングの種類を使い分けることができれば、より表現力の豊かな音楽づくりができる。今後もリコーダー奏法の基礎知識に焦点を当て、継続的に研究を進めていく予定である。

注

- 1) ベイト、P. 「タンギング」『ニューグローヴ世界音楽大辞典』第10巻、中野渡勝弘訳、講談社、1994、323頁
- 2) 川辺俊一、小谷悠紀子『英語発音+活用語彙上達法』東京電機大学出版局、1992、7頁
- 3) 田中せい子『リコーダーのタンギング—生き生きとしたアーティキュレーションのために』アントレ編集部、1998、18頁
- 4) 同上
- 5) 川辺俊一、小谷悠紀子『英語発音+活用語彙上達法』、8頁
- 6) ガナッシ、S. dal F. 「フォンテガーラ (1)」『音楽学』第8巻、戸口幸策訳、音楽学会、音楽之友社、1963、55頁

引用・参考文献

- ウェイド=マシューズ、M. 「リコーダー」『世界の楽器百科辞典』別宮貞徳訳、東洋書林、2007、148-149頁
- 小原光一ほか『小学生のおんがく1』教育芸術社、2018a
- 小原光一ほか『小学生の音楽2』教育芸術社、2018b
- 小原光一ほか『小学生の音楽3』教育芸術社、2018c
- 小原光一ほか『小学生の音楽4』教育芸術社、2018d
- 小原光一ほか『小学生の音楽5』教育芸術社、2018e
- 小原光一ほか『小学生の音楽6』教育芸術社、2018f
- 小原光一ほか『中学生の器楽』教育芸術社、2016
- 風間寛「リコーダーに苦手意識を持つ児童の克服に関する一考察—『タンギング』に起因するものを中心に」『実践学校教育研究』第19号、大阪教育大学実践学校教育講座、2016、41-50頁
- ガナッシ、S. dal F. 「フォンテガーラ (1)」『音楽学』第8巻、戸口幸策訳、音楽学会、音楽之友社、1963、49-56頁
- 金子健治『New Recorder Library』教育出版、2006
- 川辺俊一、小谷悠紀子『英語発音+活用語彙上達法』東京電機大学出版局、1992
- クヴァンツ、J. J. 『フルート奏法 (改訂版)』荒川恒子訳、全音楽譜出版社、2017
- 熊谷卓『誰にでもできる発声法』日本実業出版社、1996
- 多田逸郎『リコーダーの奏法』アカデミア・ミュージック、1969
- 田中せい子『リコーダーのタンギング—生き生きとしたアーティキュレーションのために』アントレ編集部、1998
- 新実徳英ほか『おんがくのおくりもの1』教育出版、2018a
- 新実徳英ほか『音楽のおくりもの2』教育出版、2018b

- 新実徳英ほか『音楽のおくりもの3』教育出版、2018c
新実徳英ほか『音楽のおくりもの4』教育出版、2018d
新実徳英ほか『音楽のおくりもの5』教育出版、2018e
新実徳英ほか『音楽のおくりもの6』教育出版、2018f
新実徳英ほか『中学器楽 音楽のおくりもの』教育出版、2016
バイト、P.「タンギング」『ニューグローヴ世界音楽大辞典』第10巻、中野渡勝弘訳、講談社、1993、323
頁
宮部和男「豊かにリコーダーアンサンブルする子をめざして」『岐阜聖徳学園大学教育学部教育実践科学研究センター紀要』第4号、岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター編、2004、73-97頁
宮部和男「小学校におけるリコーダー指導のあり方—導入期の指導を中心に」『岐阜聖徳学園大学教育学部教育実践科学研究センター紀要』第5号、岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター編、2005、81-
90頁
文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽編』東洋館出版社、2018a
文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽編』教育芸術社、2018b
吉沢実『いい音 見つけた！ガイドブック』教育芸術社、1988a
吉沢実『NHK ふえはうたう—ソプラノリコーダー教室 指導書』音楽之友社、1988b